

教会創立 141 周年を考えながら、この個所を読みましょう。

①いわゆる宗教と聖書を信じて生きる信仰との違い。

占いの霊に取りつかれていた女奴隷がパウロによって癒されました。この「占いの霊」を直訳すると「ピュトーンの霊」で、ピュトーンはギリシア神話に出て来る蛇の名です。普通でない状態にある人を何かの霊につかれていると考えるのは、日本でも狐憑き(きつねつき)などがあります。また、「占いの霊」とあるのは、声色を変えて話す青森県恐山の「いたこ」の口寄せと似ています。人間の理解できない状態をこういった類のもので考えようとするのを普通は宗教と考えがちですが、聖書の信仰は違います。彼女は正気に戻った後、フィリピにできた教会の一員として生きたと考えられています。この世界を造られ、その世界を今も愛して止まない神様の存在を、イエス・キリストの出来事を通して知らされ、どんな時にもその神様を信じて静かに落ち着いて生きて行けるようになること。聖書の信仰がもたらしてくれるものはそのような姿だからです。

②救われた看守が、なお救われることを尋ね求めた?!

パウロの監視を任された看守は大変まじめな人だと思います。というのも、地震で囚人が逃げってしまったと思い、自害しようとしたのですから。しかし、その彼に人生で一番驚くことが起こったのです。囚人は誰も逃げてはいなかったのです。昨夜、監獄で明日はどうなるかわからないパウロたちが神様を讃美する姿を囚人たちが聞き入っているのを彼は見ていました。「誰も逃げなかった。良かった。これで今までの生活が続けられる」、普通ならそう思うはずの彼が口に出した言葉は、「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」でした。看守は、これまでの生活が続けられるだけで満足とはしなかったのです。試練の中で余裕を持ってあり続けられ、なお自分のことまで思ってくれるパウロ。看守は、「パウロにそうさせているものをぜひとも自分も手に入れなければならない、それ無しこのこれからの人生は考えられない」と思いました。そして、それは正しかったのです。キリストの救いを知り、洗礼を受け、信仰者になるに至ったからです！